新後撰倭哥集

中

853
166

類 和歌
函號 一架 七八
書名 二十一代集
冊數 五六

第七一三號

ガラス使用

帝国図書館蔵

新後撰和歌集巻第八

羇旅哥

白河殿七百首哥に暁越関といふ事を

前大納言為家

鳥のねは関の戸出る旅人をまたよふかしとをくる月影

題しらす　　よみ人しらす

こゝの菊河ぬりこの里にやとりて明くこゆらさやの中山

熊野にまうてさせ給ける時住吉にて三首哥講せられける次に　後鳥羽院御製

住吉のまつとはなしに旅の山路はいくかそと月にしるらん

渡邊千秋藏書

ガラス使用

旅の心を　　　順徳院御製

貫之
まく分る志のはおりしく藤衣ほしてほしても山の下露

法皇御製

万十一
岩ねふみかさなる山のをこゆれはふるさとやれもしられけれ

前中納言定家

ありそのうら思ひけはしらひてもりはへぬるあはれし雲

熊野にまいらせ給ける時よませ給ける

白河院御製

そのほとに雲をさかりて藤の衣もなれはさき
なき

よみ人しらす

従三位親基

藤衣しをれてとまるやとなくはこゝにもかりね山

衣笠内大臣

山ふかくいりしはなれにし成にまよひさそひけり峯の白雲

平貞時朝臣

藤衣朝川山のおねこして雲のいくへを袖にかくらん

あつまに侍ける比中務卿宗尊親王のもとによ
つかはしける　　　参河

おもひやれいくへの雲ゐへたてゝもしらぬ心にかよふ波を

返し

中務卿宗尊親王

うくつらさやへたてれはうつてそ心はちかくさらぬそらなも
なき

旅の歌の中に　前大納言為家
暮てよ宿ハなくとも急かせしやかてかたふく山のはの月
大蔵卿隆博
忘れねおもし旅乃面影と月しそ宿にハなれさらめ
よみ人しらす
都出てさとをほそて旅衣きてなれゆく袖乃月影（業平）
月のあかゝりける夜清見の山をこゆとてよみ侍
ける
前参議雅有
立よれハ（古里）月もそこゆるかゝ見山あかのふるやこの秋まれ面影
旅の歌とてよめる　藤原景綱

あしからの山路の月乃かけならハさらに里まてゆかむ秋ハ更ぬとも
八月十五夜十首歌奉りし時秋旅
津守国助
月よゆく（万三）いのゝさゝれ枕乃夜ハ宿ありとても帰りやハせん
前参議教長家歌合に旅宿月
寂蓮法師
月これハ旅ねの床もわすれて露のこゝろに草枕かな
天台座主道玄日吉社にて人にすゝめ侍り
し百首歌の中に　普光園入道前関白左大臣
都まてみし面かけのかはりける草の枕乃ありあけの月

ガラス使用

旅宿を　後九条内大臣

しをらてかれ草葉をはらいそんこまろ袖にぬれし露

在月のひかへまくらて待もる人のまくらの中つゝ

をしきかな　従三位氏久

都にハ今ハあらしの山の枕風に旅ねの床をさひしからやと

みちの国よまちわてとなき待けつ

藤原朝範女

をとはなる嶺の中の杣風の袖にまかれぬるし川の関

往因

旅宿の中月　法印下守禅

旁ゆくさ山の下ねのひくらかれぬとまろ枕の旅人

子乃
小曽

正三位隆資

さよふけて山に夜かりやそまつ野の露によはやしほれん

古

藤原範宗朝臣

こよひくさかりて袖の露をわきもやさらんくの山ぞ

正治百首の歌に　皇太后宮大夫俊成

旅衣志かれぬ夜ハまくらにも袖露ぬるしさやの中山

題しらす　入道内大臣

旅衣夕霜さむしさ篠の葉分さやの中山あらし吹なり

一万二人九

性助法親王家五十首歌に旅　法眼源承

此歌六百番ニ旅恋乃
哥として被書あはすらの
よもの川かくとふらん
影のやうる月けうと
え
いふ旅の歌につゝけて
其ニ後鳥羽院の御旅へ
かきし被ヒトモ無果也
いまて云ふくすつる
探蝶の夢あつらしゆへき
或下句いまた嵐の枕とし
いへる云れの世の連歌なき
之定家卿有家にて
けふの庭の嵐と
付しきてひるや
ねるな今もの中に
これはけるくふひの
われのやうしてア
さるなきなれ

あとゝいく秋へてそ草まくら旅にわかねよむすひさためん

おなし心を　平時久

草枕しもをもまさき露をかたしくふとおもしの袖やかはくらん

前中納言定家

ふるさとを出しにまさるなみたかなあらしの枕夢にわかれて

寶治元年十首哥合に旅宿嵐　山階入道左大臣

いく秋われなれてしきまし旅衣うきねかさなる山のあらしに

三月の比さら後のゆわらまかりけるによみ侍りける

あひきくも花の面かけのたちもとはね山のさくらや

題しらす　源清兼

横雲ハ峯にわかるゝあふ坂の関路の鳥にあかれわかれぬる

百首歌奉りし時　前中納言有家

清見かた磯山つたひゆきくれてうらと関にとまりぬるかな

名所百首哥奉りける時　僧正行意

此哥
教長して四方へとを
まうひの〻方にまかせ
をつきりぬ

さすらふるわか身ともまたせきもりのことりの関の月をみるかな（かうしや）

恥運百首之中

題しらす　後鳥羽院

さそふなる袖も清見かたさそはれぬる夜の浪の音（と　敬本）

一万三
いかにのきよ見か崎の
ことはのきよき浪(?)をも
とりておもひしをし

院大納言典侍
きよミ潟浦風さむきゆふくれハ夏もゆるさぬ浪の関守
玉云はしり井　上云宝治二年百首　海眺望

前大納言為氏
玉雑二ニアリ
清見かたうち出てみれハふしの根の奥の磯へハ波にゆつるなり

藤原為相朝臣
かれきらぬ山のあしたをやまさとて消えにかゝる旅衣哉

法印清誉
都鳥いく代のあとをもとむ川ゆきかふ人に名のことゝはれて
古

玉葉旅
ます家改秋
いつしかと月のさすにと
よるひとん風にまかせる
みなと舟人

海路を　　中務卿宗尊親王
心からなにをまかす旅ハ行くかに風にまかせてゆく舟人

唐詩
旅客夜眠知潮生

内裏に百首歌めされし時旅泊　　前中納言俊定
吹とく浦風のたよりもあらましけのみなとをはなれてある舟人

旅の歌の中に　　前大納言資季
あはれなる奥津しらなみの江の波立えぬ舟をきらなけは

心海上人
いさりハあまのとまやにねられて月のかけにかれをとしる

後法性寺入道前関白右大臣に侍ける時家に
百首歌よみ侍けるに旅の心をよみ侍る
後徳大寺左大臣

住吉の松の思ねをまくらにてあさ川のうへに月をみる哉

題しらず　順徳院御製

御百首
蘆屋のゝ枕なれぬうきねにはなにはやあらはぬ浦風

なれぬるさとかりやのあまも我ならし一夜はかりにもぬるゝ袖を

りしの実そしるらん　如願法師

おもひそめし秋の夜の月のうら枕なれくもうきそ袖ぬるゝ

旅宿を　平親清女妹

とのつらき人もおもひおこせよひの〇にかりねの夜やいかならん

秋の風にさそふ時雨の比権中納言公雄のもと

につかはしける　藤原忠資朝臣

いさやしるへなき草の原かへる山ちにまよひても袖ぬらさん

なし　権中納言公雄

あかつきは鳥のねにさそはれてまつらん家ちからか

帰雁の残月をみおくりかへるの東をさし出て

よみ侍る　志遠上人

思ひの雨もりにしよるの月又もいかにみるかな

題しらす　よみ人しらす

たかみねの嵐まもりてとをやまてわかるゝ

百首哥よみ侍りける中に

光明峯寺入道前摂政左大臣

ゆくへさへさゝ河の小鴨乃人まかせ　古　ひとりそ風にやとさるらむ

新後撰和歌集巻第九

釋教哥

法華經方便品甚智恵門難解難入の心を
皇太后宮大夫俊成

入かたくさとりかたしときく門をひらくは花の御法なりけり

譬喩品　前大納言經任

まよひ出し親のをしへのまゝりせはかゝるのやとりを出まし　ましやは

今得無漏無上大果　了然上人

あつさゆみやよりたつさ山出て又うへもけふ花をとらふか

授記品　後嵯峨院御製

更ゆけハ西にさゝ月とさくかまよハくものやミを晴ゆら

法印公紹

むまひとく世の泊りも深山の露のかしよふめくて秋ハ（原氏）

化城喩品　　円世法師

かりそめの宿もあるをてたねらしゆくひこれらの道しるへなり

五百弟子品　　前大僧正道寶

下に（古）むすほれんをしらねハ我中の法のみあれま

以無價寶珠繫著內衣裏

法印栄雅

そうのまれ衣のうちむすひにはありかくもしらさりけり

前大僧正行尊

衣にハつゝみしむすひてしらぬ人ハ見えぬ玉かな

須臾聞之即得究竟

前大僧正公澄

一声をやみふかくよう郷にたくまに秋の月のさやかなる夜半哉

寂寞無人聲讀誦此經典

皇太后宮大夫俊成

四人の深きさ里の窓のうちに月はむかへそきて

乃至以身而作牀座

源有長朝臣

他人のきれむけわよ方ゆくいふかき世とたきさまなん

不信是経則為大失

光俊朝臣

たのまれぬ心はゆるされ文むすひきたにかなる命

不軽品

清下源為

草の庵果れわとの行在もそしぬ八月の光なりけり

神力品

信実朝臣

打ほらへをみのりの風やふきぬらんきれはしほたをみつる　ふも歟

於我滅度後応受持此経

前大納言忠良

わきらん法の世をもし頼しきそのむなつまてられしらられ

是人於仏道決定無有疑　和名求ア

八条院高倉

数ならぬそのりまれぬしわくは世をうしとはのかりけん

嘱累品

寂蓮法師

まれらあといはもとめやとま道せん法そむへき世ならねは

若為大水所漂称其名号即得浅処

従三位光成

しかれぬるさきなみれは法りきても深渕わりしそ拗のもへらむ

観普賢経見諸障外事

源兼氏朝臣

春の夜は霞やうちに晴ぬらん　おほろをさらぬ月のさやけき

同経の心を　　中務卿宗尊親王

露霜のきえてゝろ冬は消さりけり朝日まてむ雲の色紫そ　さしらす

安嘉門院大弐

世にいてゝたへなる法の花ふらはひらけん時の契りたかふな

天台の法門御尋ねありつる事使に啓せる
事を云ひくらし侍ける

前大僧正慈源

うけてしる妙なる法の花ゆへに君をそ祈る万代まてと
かけりある

釈教の心を　　前大僧正聖忠

鷲の山法の春しるまれ逢心の花の名残よの
こそ

太上天皇

さしの嶺やこの世の秋の月清きそのひかりそ心なり
けれ

家に花五十首哥よみ侍けるに

後京極摂政前太政大臣

鷲の山御法の庭にちる花を吉野のみねの嵐とそ
みる

久安百首哥に　　皇太后宮大夫俊成

つねにさし見しはみねの月にさへもこよひそ雲にかくれ
ぬる

二月十五日の夜涅槃会に人に申つかはしける

二月のなかの夜半の月入にしあとのやみそかなしき
遊し　西音法師

閣
関路とは浄土のみのりを渡せて法のみちの月は入ぬき　湛空上人

文永七年冬の比内裏にて宸筆の御八講おこなはれ
如法仏眼の法修し侍りし時宮にかはりて侍りける
ハ暴元のむしの法を思ひくらふせさせ給ひける　天台座主道玄

九重に修しく宮ハいにしへ乃法のひかりにけふやあらはん
御返し　法皇御製

昔への法をよせて今宮にかゝるむかしをなかめつる
正嘉二年法皇に灌頂うけまゐりてほとなく仙
洞にまゐりける事を思ひつゞけ侍りける　前大僧正公什

思ひきや我立杣のかはりてもまれなる法をのこすへしとは

大日経を　前中納言為房（家イ）

忘れくなかゝる心乃道しられてそいはんのちのちかひかれわ

理趣経慾無戯論性故瞋無戯論性　前僧正公朝

よそにつけるかゝる心まれなる草木のあるに任せて

ガラス使用

父母所生身即證大覺位のこゝろを

法印覚源

胎の中にはらまれし身をうけし又ありのまゝに法はあらはれん

成自然覚不由他悟

よみ人しらす

此下句歌の意は
所々に常にゆく
道にてまよへても
よるへし

まれとくりてもれみのりのた人のをしへをおしへてし道

華厳世界

前大僧正隆弁

雨ふりしもむすふ國（くに）をこそさとるなれ識のみちよりかくれゆくらしき

法性乃つきをおもひつゝよめる

前大僧正云什

をしへおく法の花色ことはにて露もわかれぬみちとなりけれ

此小野ハ醍醐寺の小
野に聖宝僧正乃流と
小野と云ハ仁海僧正
よりおこる流也

一流の事をおもひつゝけ侍ける

権少僧都道順

夏草のしけきは世にはあらはれても我末たのむ道もふる乃

醍醐小野

弘安元年百首哥奉りし時

二品法親王覚助

身をさらぬ心の月にやとされて行後の世のやみもうらんき

百首哥めされしついてに釈教

瑜祇経云如秋八月
霧微細清浄光云々
頌文なり

太上天皇

悟とゝ時八月の月乃光にひかりとなれる空も秋霧

拾玉集にあり
慈鎮の歌也

題しらす　後一条入道前関白左大臣

まよふへきやまちを近くおもふにもみちてらさハ秋の夜の月影

後京極摂政前太政大臣

長夜の更行月をなかめてもちかくなるやまを思ふ人そなき

月あかゝりける夜西行法師まうてきて侍りけるに
おなしくよもすからあかし物かたりして帰り侍りけれは
秋の夜の名残をしかるよしいひつかはすとて

中院入道右大臣

秋もなほ月をなかめて夜をとさしかれもかへるやとハ情　まさき

返し　西行法師

よしやみよ山の月にわかるれハゆくも晴のこれさらめやハ

心月輪の心を　小侍従

いさきよく月ハ心にすむ物をおもひしらやそれちかくてくもれ

前大僧正行尊

ふくる秋風はらひのやとの庭のまへハ静になかめる月を　こゝろ

蓮生法師相知侍る人まうてゝ法門なと申けるついて
なりけるによりつかはしける

見仏上人

すきし秋の闇路にまよふ身なりとも移りさめれハ君をたのまん

返し　蓮生法師

ガラス使用

やミふかきまよひもそめしかのの月まとゐの人のこゝろに
善導の流に極楽六時讃を修せられしに
かくへき方つかうまつりけるに七重宝樹の風に
ハつ寛和の理をおもふへし
皇太后宮大夫俊成
法さえし花さくほとのうへまてそ浄土の風も吹かよふらし

経云設我得仏他方国土諸菩薩衆聞我名字歓喜踊躍修菩薩行具足徳本若不爾者不取正覚

笑四十四
無量寿経四十八願の心をよみ侍ける
具足願
権少僧都経慶
吉野川花の白波たちそへよあらせをもとの色のとまりに

設我得仏国中人天不悉成満三十二大人相者不取正覚

笑五
具足諸相願
中原師光朝臣
三十あまり二のそなへし人なれハ皆身もおなし花の色

拾遺
觸光柔軟
祝部成賢
光さゝぬ日吉の影をひかりそとしりせハやとハはれわれ

観無量寿経正坐西向諦観於日といふ事を
源邦長朝臣
あらましの万むかひの空は夕附日まつこゝろのうちやにしそら

氷想観
蓮生法師
むすひめハなかれもおなしこほりやはたれとくとしめ知らん

光明遍照十方世界の心を
大江政宗

菩提樹えまちとら露ふかきそ月もすみてハ身やうけれ

靜嚴山の中に大龍の遺跡

ちとへりみえし三川まん世にあらはれのひかりのくまゝ

是心是佛の心を　常盤井入道前太政大臣

こゝろには仏のこゝろを何してかもとの心の外にもとめん

下輩観をよませ給ける　後嵯峨院御製

さはりある泥の蓮ハそれさへてちらにむとならん

普閑會

さえもまつ誠のこゝろ尋ぬる人の為にハあらはれぬらん

阿弥陀経勧信文の心を　天台座主道玄

うれしさはさなから袖につゝむともあまてる空の月をやとして

三輩一向専念無量寿佛　寂證法師

みとし程のこゝろを山の端つとも末ハひとつのそらの月かけ（三ワト〻）（かれ）

一切善悪凡夫得生者　権少僧都宥嚴

わけのほるふもとの道ハまよはねハ山風よみなさそはれてりまのなか

釋教の心を　禅空上人

ガラス使用

新続古今入数
後九条前内大臣
西のへこみちひく塩干
まかせてあとはきゝ男
法のちきりを

一こゑにたのみをかくる白糸のくるしきまゝにみたれさる　こす

涅槃経を　　式子内親王

寂の力にしもひかれ罪におもくもうかふさて池の花のうてなに　あすま

往生経を要つゝられさふりしはきらす方に　えらまぬ

けふさい護持僧正道師前親前

よみける

人のよはまりかへ行たをものへとゝ中にゐ侍れ

蓮生法師

ふかく行ひをもてるへきそ我らゆめねたとくあさけ

ぬるま中にゐは人ん

順空上人

あさ日影明にしより入かたはあれと我ものとは西をしれ（釈迦）（弥陀）

題しらす　　基俊

きみのかく月の光をまつ人もいかく我心なれ

往生礼讃に必有事礙不及向西方但作向

西想亦得といへるを　　法眼能信

夕暮はまたおもふ月のかけも入へきかたをえやはまよはぬ　せる

涼勧を　　唯教法師

みな人の我かたにとてはいかなれとそのあるさは月は西　とも

まよふるに海うてて見ゆるなるか

賦因
ゆめうらくつまなきや
つのくにの難波あしも
まのをもおほりきゝ

後京極摂政前太政大臣

めとらふるありてそ津国乃難波のあしはこゝろへなりけり

同寺まて而この名をとへとかなふことになりけり

亀井　　郁芳門院安藝

まれにこく御法の泉をこそくれいうさまにはへり亀井なり

久安百首歌に釈教　　大炊御門右大臣

世中をいとふあまりに（古）あるのねもさそぬ山のすみかなりけり

合會有別離乃心を　　前大僧正慈鎮

帰るさにあへはまたれのかすしまたにこそてや脇の末をとふらん

釈教歌の中に　　鷹司院帥

色もかもむなしき物とをしへをもいふはあるをやなそまし

金對般若經不應取法不應取非法　　法印定圓

吉野山まつくるべき父もなしやまも桜も春風そ吹

我於阿耨多羅三藐三菩提乃至無有少法　　普光園入道前関白左大臣

愛なからはまことめし法のこゝろもなほしれなきこそうつなりけれ

最勝王經吉祥天女品の心を

皇太后宮大夫俊成女

ちらひあれは雲の月の影人袖にさへうつりけるひかりとそ見る

圓覚経始知衆生本来成仏生死涅槃猶如昨夢といふ心を

前太政大臣

さめやらぬうき世の外はさらにそとみしは暁の夢まれなりけり

欲知過去因見其現在果を

法印圓勇

ねかふとも生れ行方はしらすともこの世まそのつきさそみる

當生無色聲那度

参議雅経

行来るまこかはゝらぬ川の橋柱とゝし枕行人まてせよ

以観ゝ照即寂而明

前大僧正慈源

むかし雲ふかく隔し月ハ猶もてるやそさやけきひかりそそふる

大日経三ゝ昧耶不現般涅槃成就衆生

了従上人

ほとけには入ぬとこそ雲の月も猶すむこの宿のけはひとある

仏法秋九月経蒸（慈氏）（小守）始入天台といふ心を

寂然法師

長月のそらの月とうちゝもまた入けむ峯をとふひとそやなき

迷悟一如の心を　僧正範憲

さとるへきこともさらになかりけり迷ふ心をまよひとしれは

一念不生　心海上人

草葉にもむすはぬさきの白露は何れたよりにきえしめらん

堀河院に百首哥奉りける時

基俊

題蓮

うき世にはきしれは濁江の蓮にやとる露の光とも成らん

煩悩即菩提の心を

今出川院近衛

うれしさや独にうつらし覚くとも衣のうらにかけし玉とは

題しらす　見性法師

われそもとより法のまことをしらねはそつくへきかりけり

五戒の中に不妄語戒

惟宗忠景

いつはりの心なしと思海にうたかたその法乃海とそなりける

釈教の心を

花山院内大臣

むかしのたまてにこゝろにうちそへてはちかへなりけれ

前大納言教良

いかゝせん法の海てもしらぬ方はくるしき海に又やしつまん

円空上人

ガラス使用

あとはしる人しらずともなきりせなうるべき世のほどをしれば

猒離穢土の心を　前大僧正慈鎮

これ人のさらぬ別をおもふから海をいとふかなしかりけれ　古

題しらず　僧正道潤

りすゑまでまよふならひとおもひしをさとりしらぬ人それぞかなしき

慈道法親王

さとりぞておもふもしるし心しらずまよひのあらんさきしめたるらめ

百首歌奉りし時釈教　前内大臣　実

あらしらる人の心からうらこもさまそてやむべき法の水かな

おなじ心を　前太政大臣

外ならき法の水の清ければ我心よりすみくもるべき

権中納言公雄

たのもしく誓を見くや法の水の流れみなかるとひてくましし

叡山乃房にまかりて人々法門の事申ける人の返事に　前大僧正公澄

法乃水何なれどもむまれても心くまるそれなりけり

唯識論の南北有法趣及涅槃沙汰の心を　権少僧都良信

こゝろしもおなじ心のみなれば又うらさとはまだあらぬ

ガラス使用

如清水珠能清濁のこゝろを

法印実聡

きみかしよその心の清けれハにこるもさそぬ玉の井の水

題しらす

権少僧都実尊

我も猶悪のさわりふかけれとも頼こみかたにたのみける
かよの法佛の御おしへきまかひいくらひつきぬる

平親清女妹

ちる人をよふるさやらはまよふともおなしみのりの清の池

釈教の哥とて

澄覚法親王

いにしへの跡をたゝかんとかけくもらぬさへ清のこゝろし大

新後撰和歌集巻第十

神祇哥

百首哥めされしついてに神祇

太上天皇

みしやかつ七代又代の神世より我か國をハ猶まもれとき

題しらす

二品法親王覚助

神のます秋月まても五十鈴河ふかれて清き流のかひと
しらみへしらに

神路山しめ縄のつきもまたの山路ハ此世のこゝろ

荒木田延職

ガラス使用

榊とて御川のなかぬきしるし君か御代のかさらの宮人

大中臣定忠朝臣

まれのくみ海きの四代に跡されて今のよりめくみ御裳濯河上

度会行忠

かゝりけるさわすてら神のみせ流むかしを今まうつしてける家
らる人しらす

君代をいのる道の神路山ふかきちかひをいのりかけつゝし

康治百首歌めしけるついてに寄社

崇徳院御製

石清水清き流をたえすして神のちかひは御代をたのむかし

拾玉集二
年くとへて神もうけ
らん清くまことをひと
たしあるらくるとを

神祇の心を　院御製

石清水ふかくも思ふ我心人しらすとも神はうくらん

天台座主道玄

ちはやふるひえの山の中にあるみそき河の流はさやけし
なし

前大僧正禅助

もろむしを神もうけれは御法みそきして手向ともなかれし

百首歌よませ給ける時神祇

後鳥羽院御製

よろつよやあら神やまもるんのあらう一ふたすゝかくる影を

おなし心を　太上天皇

ガラス使用

名もしるし峰にたえせぬ松の尾の神のちかひは末の世のため

前中納言定家親父中納言之後忠春日社
年代をへて従三位に叙して侍りける朝に
よみ侍りける　　　　前参議雅経

神もまたきみかためとや春日山ふるきみちある跡をまもらん

返し　　　　前中納言定家

ふりにける昔のあとをたつねてそ今日のみゆきの神もしるらん

神祇の歌の中に　　前太政大臣

思ひけと忘れぬものを春日野のかよふこゝろにあはれかけつゝめくみ

中納言家成家の歌合に読

　　　　藤原道経

三笠山おひそふ松を君か代の千世のためしと神やしるらん

題しらす　　　永福門院

このもとをさ頼みに三笠山あまねく神のめくみをそしる

後一条入道前関白左大臣

猶たのむあはれとおもへ三笠山ゆくすゑまもれ春日のちかひありては

春日社にまうてゝ読侍りける

　　　　民部卿資宣

頼みてもしらぬ我身の行末をあはれいかにと神はまもらん

中務卿宗尊親王家百首歌に

前右兵衛督教定

きしはしらぬ神代はふけれと松や風はむかしときこえく

神祇の心を　　中務卿宗尊親王

住吉のこゝろ松のあらはれしれや神よりさきの人

従二位行家住吉社にて歌合し侍きるに

前右兵衛督為教

神さひや松のみとりはけふくも紫のさけるの花のいろ

久安百首歌に

皇太后宮大夫俊成

つくりゆくのこゝよりもまつらん神さひはいく住よしの春

ひし雅も　　前大納言経任

住吉の浦乃松かえさしとく神さひまさる風の音かな

前大納言為氏住吉社にて歌合し侍ける時

社頭松を　　法眼慶融

絶せぬ道をつけても住吉の松をやいつか頼みけん

題しらす　　津守棟国

君かためうゑてしむかし神垣におひそふ松のさかゆくこそ

住吉社によみてまつりける百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

和かの浦乃名をはたえせぬ神なれは衣をつけよ住吉の浜

神祇歌の中に　　法印定融

月清集上
をしほまでくもりなく
なにすめる住吉の浦に
下句は

若浦の浪まをわけし神ともむつの神道とおもふかしこさ

廣田社歌合に述懐

権大納言実国

天くた神のめくみのあるならはわれ八重かさねぬさ秋のかけり

久安百首歌に　皇太后宮大夫俊成

思ふ事ここのめ綿はいのりこん枝にかゝるしのとうへ

思ひしらす

前大納言為氏

さゝ波や神代の松のちよまてもむかしはかはらぬ風そ吹

宝治百首歌奉りける時浦松

祝部成茂

万十一
[illegible]

辛崎やさゝなみ浦まま清く神のみかけそしるしらる哉

跡しらす　天台座主道玄

くもりなき世をてらさむとちかひてや日吉の宮に跡たれけん

祝部成茂

ひかりそふ日吉の宮のさやけさや七の星のかけもさやけき

日吉社によみてたてまつりける歌の中に

前大僧正慈鎮

たのもしなゝやのやしろのゆふたすき日吉のかけにたのみてそかくる
さへ

題不知

法眼源承

思ひいる神のちかひにけたくむかくらの山の秋月

祝部国長

榊葉や立かへりつの杖乃影をさかきねて世を祈す

祝部成賢

神のさにはのあらく此中はけく祝さしつゝ玉ねの御榊

日吉社に百首哥よミてなりけるに皇太后

宮大夫俊成すゝめよみくなる人さよしや帆

うきる一條しらけは八流のをしへ

前大僧正慈鎮

いそくハ君も見ひをとろへさらん神にたのむくも古白檀の紀

見し

皇太后宮大夫俊成

年もへぬいのるちきりハみちかりの花にかなへんことのちかれ

神祇乃哥の中に　祝部忠長

身をそく露のまにまに枝わかくに神をあふきやはまもてらるれ

日吉社に詣てゝよみ侍りける

前大僧正公澄

祈ること神にあゆみのさきねは人にはたのまれもせめて神か

人にすゝめて玉津嶋社にて哥合し侍りけるに

前大納言為家

社頭述懐を

從よれまてのちかひを忘れはいむかしよ玉津嶋和歌の浦なき

前大納言為氏

神よりも我乃まもりしみしめ縄よの人をハわすれはてるな

題しらす　　祝部行氏

もゝ人ていのる心をきこし食のあらはれ代に神とあらはる

鎌倉右大臣

瑞籬の久しき世ゟゆふたすきかけし心ハ神そしるらん

太上天皇

ちはやふる神と君とをやかけてなかし思を秋のよの月

千五百番哥合に　　権中納言定家

さ縁ありく榊よりもし猿しも君か記しのかけそみえける

野宮左大臣

榊葉に君のちとせをゆふかけてそり神さひ山のあけほのゝ空

神祇を　　鴨祐世

久しくも宮の榊をとりそへておもひし記を千世といのらむ

祝部成久

神かきにちかふ心をゆふかけてのちひくちからにそ祈らん

平時村朝臣

祈られて神ハ我代をまもるらん我は又祈今もいのりきぬ（不イ）

賀茂重保社頭にて哥合し侍りけるに述懐

の心を　　皇太后宮大夫俊成

立かへり捨てし身をもいのるかな代ゝに会へるハ神よしるらん

みやの神ましまさゝし

万葉一人丸也云々
とかの木乃いやつき
に天の下しろし
めしゝをし　葉三
葉六赤人山部
二句のつゝきあり

弘安元年百首哥めされしついてに

法皇御製

まてしき代神乃みしるくらをさつるや流きくに世をしらは
熊野ま浦の世経けり時よまゝ世経をろ

後鳥羽院御製

世とてしも新しき出く志熊野山出てる乃うに
きめる月かな

新後撰和歌集巻第十一

戀哥一

弘安元年百首哥たてまつりし時

入道前太政大臣

人しれす思ひ入野の花すゝきみたれそめける袖の露かな

弘長元年百首哥奉りし時恋歌

前大納言為氏

いりそめし人しけきをさゝの露ならて袖ぬらすとも我涙かは

神祇伯顕仲 新勅撰二
あかの心しけきをさゝの
つゆをわけて袖ぬるゝ
かなしき神の
心あさと人を
さしてふかく
こひしき
いは

後法性寺入道前関白家百首哥に忍恋を

隆信朝臣

さもこそはまたきぬ夜のなこりならめ思ひしらすや涙もるらん

新続古
秋のひとを

題しらす

左近中将具氏

古 はかなしやいつかはさんと行末の命も志らて涙思ひしるらん

前大納言為家

之衍字 しられしな霞にこめてけふりたつ小野の若草したにもゆとも

秋萩かりていおもし
虫の二なきし秋萩
秋小萩とやけふの
みるよりふかくおもふ
ひとのため

正三位知家

しるやいかにいはて思ひのしのふるはふかき涙にそてはぬるとも

金葉 新千載 又千載 上
藤原伊家
かりしもはるかなれ
なみのいまのこゝろ
しみるとなき

藤原重継

しられしな露かゝるとも下荻の 古今 もれてはいはし人に忍ふを

藤原為継朝臣

ほのかにも難波のあしはいふなれとたれきゝつらむかたとこそきけ

寄煙恋の心を　鷹司院按察

むねにのみおもひはあまて富士の嶺の煙ならねはしる人もなし

恋の歌の中に　式子内親王

わするなやあさか山にのちやのこる井にかけ見し我（くイ）心とは

後法性寺入道前関白家百首歌の中に恋

隆信朝臣

あはれとも誰か恋をとはさらんあはむかたなき身はしる人もなし

題しらす

鴨長明

うきなからまたたのむ絶えぬ思ひにかきかはすれて捨やはすると思ふ人かな

万十六
あさか山かけさへみゆる山の井の
あさくも妹を思はなくに

拾
このよにてかくてやみなは
わりなき恋はあやなくも
と人のとふまて

大炊御門内大臣

色ふかくなりける人に出ぬへし方にはしそめぬ心とはしれ

従二位為継

かひなしやしられぬ中になかくして心ひとつのたえぬおもひは

後嵯峨院大納言典侍

人しれす我思ひのほとをさりともとあはれとやしらむ

平政村朝臣

涙こそしのふの袖にみえてさへつゝむ袖を人やとかめん

院大納言典侍

せきかねてつゝむ袖にあまりて人めにしらるゝ（もイ）涙なりけり

ガラス使用

前中納言匡房

下にのみ思ひのむせかへりかくさぬされは袖そぬれける

後京極摂政家六百番歌合に

大蔵卿有家

伊勢集
秋の夜のあまりのあまたの袖
まかねことかなく

なよそら雄嶋の磯も何のこととく袖はあまた拙人

名所百首歌たてまつりける時

前中納言定家

恋わひぬうらみの浦をとりみのよそにもみえぬ人をこひつつ

僧正行意

續拾遺恋一已出

とのつらかけても袖にしらまそれはいはせの杜乃秋のしら露

新集いふそのりて
さらに
拙頃いはせ杜の下
草をしたにみそ
まくかな

土御門院御製

秋風はいはせの森の下草のみたれてのことも思ひらな

前関白太政大臣

しられしなさても思ひの杜乃露ならて涙の袖にみたれちる

祝部成茂

すへしれ思ひの露かゝるにも袖の色はいかにかはるらん

寛喜百首によみ侍りける時寄衣恋

常盤井入道前太政大臣

多くしぬこれや思ひのしのふ衣すりみたるゝ袖のしら露

題しらす　後嵯峨院御製

後拾　実方
浦風になびきにけり
な里のあまのたく
もの煙心よわさは

山のはゝ出きりにかくれぬみちまでもいく年月をすこしぬらまし

前大納言為家

みちのくの忍乱れもそめにけり摺衣なをさりならぬ人にしらせし

建長三年九月十三夜十首歌合に寄煙恋

前大納言資季

峯の松乃きえぬ煙もたゝいさえ力の思ひを人にしらせん

後九条内大臣

浦風にたくもの煙すひくとも思ふ方を人にこゝろよつきせ

新續古今恋一　兼好法師
こゝさいえの庭のむもの[illegible]
しらぬ人にふきこてはと

前右兵衛督為教

あまのすむ浦のとまやの夕煙おりひきむとも人にしらるな

後拾　実方
つゝめともよまくかた
らてまかりやのした
くゆりつゝむせひて

千五百番歌合に　大蔵卿有家

かつらやのかやりはさてもむせふとも思ひありとは人にしらせし

恋の歌の中に　従三位藤原宣子

我のこゝろゆか煙乃たちのしるしを人にまかせてやおもひきらん

院に三十首歌奉りし時不逢恋

入道前太政大臣

頼めおく契はなしし夕暮をまつにいはぬ中にこひしなぬとも

題不知　よみ人しらず

いかにせん思ひつよくぬ命にて後のうき名の世にや残らん

後京極摂政家の六百番歌合に

大蔵卿有家

思ひつゝ此世つきなはうき事の恋のさはりやまたもよに残らん

恋乃哥とて　祝部成良

いかにせん袖に人めをもる山の露も時雨もわかぬ涙を

今出河院近衛

思ねと人をもとかめうらむの夢はまことのひとりねかなし

寶治百首哥奉りける時寄夢恋

少将内侍

古
すみの江のきしによる
波よるさへや夢の通
ちひとめよくらん

むはたまの夢もうき路あはれなと人めをよけて見えすなるらん

尚侍藤原親子朝臣家哥合に忍恋

内大臣

うしとても涙ゆるさん心をも人にしらせて人をうらみかねつは
袖しらす

院御製

みなとやなさけくもなき涙にもよるともむの浦のかくれなりけりと

西園寺入道前太政大臣

人しれす思ひの色は下そめにうつる涙乃袖をみせはや

法皇御製

くれなゐの涙乃色もさしなから秋は時雨に袖やくさ
ゆうす

住吉乃社によみて奉りし百首哥乃中に

皇太后宮大夫俊成

秋の野の萩のさけにはぬれもせて麻のかくも人にあはなゝか

忍恋乃心をよませ給ける　太上天皇

此ころハ野への小鹿乃聲によそへてくるゝねからといそくらん

寄鹿恋と云事を　前大納言為家

をしそね抱し人はさて（古 三条町）世やさよふく泊のつまとふ人は

弘安元年百首哥奉りし時

前大納言為氏

いしかや山のとかけてせく池のひゝきさゆる人ありけむ

宝治百首哥奉りし時　寄湊恋

山階入道左大臣

せきかねぬ涙に袖乃みなと川今ハたえまもなきやなりなん

恋乃哥の中に　津守国助女

埋木のさてや朽なん（古）名とり河あらはれぬへき瀬々しなくは

よみ人しらす

かくれぬの入江におふるあしの根乃下にかよはゝくるしかりけり

道覚法親王

見くさゐる（古）桜井の清水はさてくまにそねとはてみる人は

平重村

へたふさんみのうらみさへしみにあまりてかくる袖のあさと

衣笠内大臣

秋ならていかなる山のたかねもしらん人めましてそぬるゝ袖の露

内裏に百首哥たてまつりし時述懐

藤原為藤朝臣

ものつゝましきは我もいかゝせんせくに袖にあまる涙を

尚侍藤原頊子朝臣家哥合に同し心を

津守国冬

せきかぬる涙はあしゝめらまに思ひにはすしらぬおとも

題しらす

よみ人しらす

しのふるは思ふ中をたにくへし涙つゝさまてせく涙かな

雑四
行さきもたのみかたくも
よそはまうけのおそ
めくらまし○めにまとや

正治百首哥に

前大納言隆房

人しれぬ心よりこそみたれさ末のくらゐ名をや袖にこほれん

寛治元年十首哥合に寄久恋

後深草院御製

つれなさもとはれぬほとゝちきりては年月にそあらまくもきん

前参議有教

秋きてもねさめの山の松の葉もたくひ色かはるまてものかは

題しらす

素暹法師

夏山の秋をしらせてまさに萬代をあつめてうしたれきん

前関白太政大臣

風雅雑下
左中納言雅孝
ちかひしもこひぬくも
かはりはてぬみとはかく
さためなきよのつねに

なつかしく後もいて世のつかん思ひしらるゝまきれつまるゝ
うき人そつらき

いさそよのうらみあまりふかきなくさめて打や思はん

右近大将道平

人しれぬ思ひをさそふよなかの心のうちをいかにみせまし

後伏見院御製

思ひうちたのめしわかしるへき誠わかれに文いかてかへりけり

後京極摂政家六百番歌合に

法橋顕昭

うきなからさのみはいかてつれなさにいそてくるしきこゝろなるらん
あはれ

思ひきやありし人にはいきて
見つる他人のなかにはて
いかにしは中にはるかは
くるやまひけり

恋の哥の中に　大宰権帥為経

はかなしもいひくらやなくさむと思ひてよそふ人を恋
ちや

百首歌たてまつりし時　忍恋

尚侍藤原親子朝臣

秋かりのうき名をたれはと思ふも心かよはぬ人やまさらん

宝治元年十首歌合に忍久恋

右近大将通忠

年ふれる涙なからもそのいろはつきは袖のはまもあら
なき

題しらす

紀淑文

うつゝは袖の涙はもらされ誰ゆへとふ人のとかむるは

祝部成久
つゝむ事難くはいはぬ思ひをもなとやよその人に知るらん

右大臣
せきかねて涙は袖にあまるとも難くはいはてもらさん

懽子内親王
そことなく物を思ふにはくめはあまる我涙かな

千五百番歌合に　宣秋門院丹後
まよふそは袖にまさらし世々のはしにやそて涙の色にこそ見らん

恋乃哥の中に　賀茂久世
なかれしとおもふ心もいさや川せくにせかるゝ紀しなかねつ

祝部成茂
袖乃浦の濤入江にかゝるしら浪は我やうきみさそふらん

平為時
かのこゝろ思ひをすらは涙もせて積うき名のことを何嫌外

正安元年百首歌たてまつりし時

大蔵卿隆博
下もえ乃けふりの末よ空にのこる立のほるとも人はしらしな

堀河院御時艶書の歌を人々に召して女房
につかはして返歌をめしける時に讀侍る

権中納言師時

ガラス使用

曾丹集源順のう
まつる詞　あるく
ちかころかくかく
ものゝあはれとよみて
六帖二山
よろつよをたのむの山の
秋風の吹くともなの
なかくなるらむ

思ふ事と知らせ人はいはさらむわか身にあまるなみたなれとのなかれ
なし
郁芳門院安藝

思ふともいそのかみにはそれならて思ひ侘ぬる袖にまかせて
依源順朝臣名をかへて事を

藤原為道朝臣

いかにしてもらさしとのみまもりつゝ古袖の中なるうきなかるらね
知らす
平兼時

思ひきや人はしらしなよな〳〵の古袖にあまりぬ涙なりせハ
中臣祐臣

いまさらに忍ひはてぬのあはれをはうきおもひにもたくへてそしる
なせし

此うたふるき歌也

よみ人しらす

くやしくそつらき心をあはれとて思ひしまてはわするへらなる
名取百そ奇めされしつゐてに
順徳院御製

ほのかにもしらせて(しれ)後は東なる霞のうちにあまりなりけり
弘安元年百首歌奉りし時
静仁法親王

わしの風の音やはあまり人しのはれて袖ぬらすとも何しなるかな
前中納言為兼

元良親王
いかにせむわかつりてての難波江にみさきおもひしるしもさへ

百八
こさめふるかたとに
ふかき秋の田みるさ
ほのかにもいはぬ
つも

題しらす

源親長朝臣

いつまのたむ浦のむらとりそめふみちらしまつ袖ハ

光俊朝臣

むら雨の風にて秋の夜の月影のさやくもみてし人そ恋しき

建保四年内裏十首哥合に

参議雅經

秋の田のまさほのうへに露わけてむすふちきりハかりにそありし

新後撰和歌集巻第十二

戀哥二

弘安元年百首哥めされけるついてに

法皇御製

なかの人ハつらくもなき世乃数とて思ふまて我いのちかな

弘長元年百首哥奉ける時不逢恋

前大納言為氏

かきりある命のほとハつれなさも恋しなぬまそひさしかりける

題しらす

太上天皇

あふ世をハちきりもやらて恋しなん年をかさねし命期まけて

百首哥のめされしついてに
つれなさのかきりをせめてしりもせは命をかけし物はおもはし
題しらす　衣笠内大臣
恋しなぬ身のつれなさをおもはさて今そまたれしおなし夜すから
中務卿宗尊親王
あらきなくいつまて物をおもへとてうきにのこれる命なるらん
前中納言俊定
おなしくはたゝそのまゝに恋しなんあはれはのつらさおもひしれ
院大納言典侍
なれてうき命まゝく時のまも世をなかくそ代わかふかくるか
藤原業尹朝臣
ありしへてつらさならはなかなかにしあはすは命をかくる世なれ
藤原為實朝臣
年へてみるをかはつまらぬを恨みて身をそへてまするまする
百首哥よませし時に恋
右大臣
これも又たのみし袖のかれしかはいかにあらぬ中もあはれならん
寄年恋といふことを
今上御製
うつろふはあからぬも年をへてみる若葉なる過しとてはちきりをそとめ

恋乃哥の中に　　静仁法親王

あふとみし夢路はうつゝにかへてうらめるはよもすからなれ

前中納言為兼

逢ことはかた糸の乱そめてゆるさぬよりのせきかな

右近大将道平

ほとゝきす我恋しさの面影をさそひてもなけかるゝ

伊豆盛綱

わりなしやいかに契てかはかりも忘られぬ中の夢とみるらん

法印長舜

面影のうきをかさねてみてもせめてはせんとり夢のはかなからん

建保六年内裏哥合に恋哥

常盤井入道前太政大臣

ふる物はつれなき人をみし面影をあはでもいかにさてもなけやしくらん

題しらす　　前大納言基良

いかにせんまたわすれぬの夢はかなしとみんぬよはたえすきぬもかな

光明峯寺入道前摂政家恋十首哥合に

寄衣恋　　従二位行能

ぬれ衣のそてをかへしのかくさへも夢まちまちの夢やみえなん

恋乃哥の中に　　大江広茂

おもひ糸の露に衣をかへしてもなくさむ程の夢をたにやはみえなん

名所百首哥よませ給ひし時

皇太后宮大夫俊成女

まけぬらつ伏見の里は夏ふかき人もすさめぬ床をとふ梅松
ゑを

光明峯寺入道前摂政家歌合に

遠恋

前大納言資季

思ひやるのふかく山の音もしるやわかれもちると鈴くゝな
一九三

題しらす

前参議雅有

あふまてや人をちらすれ忍夜の泪かさねてひとりぬるらん

よみ人しらす

うき種とうけれはおもてなきやうつまとなきゝ中はあらぬ明月

續拾遺恋五
権大納言長雅
あはれよのかなしきにも
ならはしきは涙なれ
る袖にとまるや

忠峯歌ハあはれにして
哀なる人のよめる歌と

寄弓恋といふ心を

院御製

うきかたにはつまひかれけり梓弓いかなるかたに心ひくらん

恋哥の中に

前大納言為氏

いはぬ中々につゝまるゝうきなはかけてもらすなよ
いふと

光明峯寺入道前摂政家恋十首

はかなくてあふそ月日はかさねてもいつまておもひまなれぬらん

前大納言隆房

秋くるゝ日の秋には袖をとはせてさのみや人のつらくなるらん
けり

平貞時朝臣

逢までのちきりそ今はたのまるゝ心のかきりあられなも

弘長元年百首歌たてまつりける時不逢恋

信実朝臣

後はいさあひみぬさきのつらさこそおもひしらるゝためしなりけれ

題しらす

讀人不知

せめて猶後はいくよも逢ことのつらき似ぬへく我身ともかな

宮内卿経尹

今はさて文は出くやうらみしさかと思ひねるかなも

藤原為実朝臣

いつまてか淵の河乃浅き世におもひ渡けてくちはてなん

錦木ちつかにあまる / しくはよりはつのは / さてもかくれたにて

弘安元年百首歌たてまつりし時

花山院内大臣

うき名をもや猶そたてん錦木のちつかに餘る人のつれなさ

弘長元年百首歌たてまつりける時不逢恋

常盤井入道前太政大臣

なき名のみ古立乃浦波よるよるはうつゝにぬるゝそてかなしつけ

百首歌たてまつりし時同心を

津守国冬

浦風のさむしき濱の松とみよつまこふ袖もしほるらんやはいなや

題しらす

左近中将師良

こゆるきやみなとを過りて野袖ぬるゝちらすらん波

衣笠内大臣

こくとおもつきく 業平

伊勢のうみのとの湊によのうつゝ逢さる我の波のまゝなる

六帖

後鳥羽院御製

もしほやくあまのたく縄打はへてくるしとよふかまつらるゝ

うさき

宝治百首奉りける時寄衣恋

少将内侍

古

とのつゝき逢事もあこきか浦のあまの塩やき衣まとをなとも

とも

恋乃哥の中に

平長時

玉葉恋一平長時

伊勢の海士のしほれ衣波はくしつゝえ袖もぬれまさりけれ

名所百首奉りける時

従二位範宗

万四人丸

三熊野の浦の浜ゆふいく代へぬるおもひね浪を袖にかゝねて

十五首歌合に

小侍従

夫丹

浪よりきゆらの湊をこく舟のしるへもあへぬわりなかりけり

行しらす

藻壁門院少将

古 おもしろ人や

もろ人のさゝほにし小舟播ませくおます入江のあたにこれて

西園寺入道前太政大臣

新字 ころもほす浦さをき

ろ乳

あまもろぬかるおもひのうちにゆくやらし

さゝやふみめかんの浦に住あまも心のうちはねやそすと

左大弁経継

ガラス使用

ねさめやことゝみなと子
わかるゝきてひとの袖
をかくはかりそしら

ゐてし

おもひわたるみちても
ちく蛛もつらぬのか
乃あともこそ

催馬楽
さはた川袖つくはかり
はりまてとくにのみや人
たかはしわたす

みな人はいまは涙ととまらはわか衣ぬれぬ袂のなきそしらん

待賢門院

つきもせすくもわかるゝともかは涙やとゝ海のあまのゝ袖にかけつゝ

家に百首哥よみ侍ける時名所恋

光明峯寺入道前摂政左大臣

立田河くれゆく秋のもみちはのまさに神のぬさなれは（古 業平）

後京極摂政家六百番哥合に

従二位家隆

いかにして錦をさらし沢田河袖つくほとの瀬になるとも

恋の哥の中に

安嘉門院甲斐

はつせめのこゝろあれてはやまもわかせまさらぬ泉の山川（古 万）

三條入道内大臣

思河せのこゝろはうつりゆく涙の淵をいかゝせきや（後 いせ）

藤原延行

思ひ川うきまし人のこゝろも下にみたれてなかれまさらん

如願法師

涙川うき瀬はかりにわかれての淵のすゑはふかくぬれ袖

隔河恋

民部卿成範

さしまてゝいとゝろかの中にへたつるをみなせ河とわたりかねつゝ

題しらす

藤原季宗朝臣

後
川とにこそちゝめかけ
みちのくのいへは
おもふたかきこえけり

万七
こちらくはかりかりせん
とへかけの野への下
草つかれしかとも

人またぬ道のすゑやいかならのひわく居河のわたりからん

奨子内親王

よそにのみきゝわたりつるおとなし河わたりぬ中の頼りたのまれ

法眼行済よませ侍る熊野十二首の歌の
中に

大蔵卿隆博

我袖の袖はかりやいはしろの野への下草露ふかくとも

光明峯寺入道前摂政家三十首歌に

普光園入道前関白左大臣

熊野河ゆきゝの里も暮はてゝ宿や人よあかぬらんこそ
道の方ぬ中よ

素暹法師

古今
みりいやころもかへる
にちりつもる道まよ
篠ちるおつ人のゆき

ゆふひゆく末はいつくとゝへとも我道しるへする人もなし

人にすゝめて日吉社にて廿一首歌よみ侍りける時

天台座主道玄

相坂の関のこなたにいつくれはまたこえもせぬよりやとるらん

寄山路といふ心をよませ給ける

今上御製

関なくてたゝ逢坂の山路には急ける中に物思ひし
ひしらるて

権大納言師信

誰よく相坂山の夕風ゝく我身よこしぬ人とならん

前参議実俊

いかにせんこれも人めの関もるにかよひなるゝ逢坂乃山

白河殿七百首歌に寄雲恋

前大納言為家

伊駒山へたつる中にみねの雲何とてかれぬこゝろなるらん 一万十一

建長五年九月歌に寄山恋

太宰権帥為経

よこととふのもゝもいくへいふき山さしもつまれぬ人にしらせん

題しらす

よミ人しら須

五

あしる山いもせの山乃峯の雲ゐにしれハよそにあはれとも見よ

千五百番歌合に

二条院讃岐

續古今恋二巳出

富士の嶺も空にハあらぬ物と思ひのほとを何にたとへまし

恋乃歌の中に

参議雅有

煙たつ室の八嶋ハそれとや人に思ひのゆくゑしらせん

建保六年内裏歌合に

後久我太政大臣

新勅恋三巳出 右内大臣

后令

松嶋や我身のかたにやくしほの煙乃末をとふ人もなし

寄煙恋を

前中納言定家

須磨の浦のあまりにもゆる思ひハ藻塩煙にまさる人なし

堀川院に百首歌たてまつりける時

大納言師頼

新拾遺恋二　法印良憲
はかなさのかきりも
しられ世はいのち
ありしとのみまちられ
さ

新葉恋三
嘉喜門院大納言
住よしのきしとまて
ふりきてまても久し
きこの松やられ

あつまちのおりゐのうらを見おきてやこゆらんさやのこ
さん

千五百番哥合に　後京極摂政前太政大臣

はまちとりくもれるよはのまゝにやみにまよひてなく

新後撰　権大納言実教

うき人の心もしらて我なからいかにおもひてすゑの松山

内裏百首哥奉つりし時恋の心を

前大納言為世

つれなさをうらやみし袖になみもこえきは後の松なりけ　恋六

恋乃哥の中に　小侍従

住吉の松はいつの世しおもひけむも久しくなりにけるかな

後撰
いせの海のつりのま
てきとゆきまかせち
うへつりしみへてし
うきしらて

高階宗成朝臣

あつまちにおしへとれそも松の緑くやわかそやらん　古　拾

遊義門院大納言

恋これぬいせ嶋とふ山のつれなきもさまて人にまつとこそきけ

典侍親子朝臣

いさせめてもまつはたへさら袖なれとおりてや人のつれなかるらん　不審

弘長元年百首哥奉つりける時不逢恋

権大納言為家

とへしなおもひまてくさのはやくも我命のおもひへもせん　不審　後英明　本云

題しらす　定為法師

待きちはれうれしきもあとはかりへていのつきせぬ命なるらん

藤原基俊

恋しさも頼む逢瀬のあれはこそ惜しからぬ命なりけり

法印雲雅

なからへてあれはあるよに此人も惜しまぬよのとなりけれ

新古今恋三刑アにて新補　こひしなんいのちをなにもをしまねと
おなし世にあるかひはなけれと　詞花恋上　覚法師　共すれは
うきみをはへてとてもまつれ同し世にすこたれよあくて
續後撰恋二　信実
いける身のかひはなけれ
とふひしらぬはおなし世を
うたれやこられん
玉葉恋一　定家
こひしなぬ命もしらぬちゝくへて
同し世をたにつれなきもかな

西行法師

いかにせん我のちの人とおもふともあはれもおもはす心なりけり

入道前太政大臣

うらさしはあはしちかひもあはへて同し世にたれありとさかれん

弘安元年百首歌よみし時

藤原為氏

我ならは命よりけにいとへとも惜しまれぬへき身とならはや

百首歌奉りし時述懐

前内大臣　実

行くも又あはれなりしにむかしをのいて世をうけて思ひしられん

恋の歌の中に

大江則重

めくりあはんこともせてあはぬ我身ならは命をすてゝくるまえされ

源親長朝臣

はかなくも我か川辺の身とならて後の世まてや人を恋ひ

千五百番歌合に

醍醐入道前太政大臣

ガラス使用

万十一
こひすもこの被くそく
のくまのくられ
小萎れ笠とききて
とまふらり
まかせの小萎て
笠をねるらさく
のまちるとまつへきあら

池のまつりをねしのうき枕かす袖かさりき袖まかる

題しらす　　前中納言資実

行水に数かく人も我しくはすゝきさえ袖やぬれなん

堀川百首　思
つれなさをなにゝかたらん心からうらみもはてぬ
とこくつれなかりけるのとまれ

　　藤原顕仲朝臣

物思ふ人はいまはこれこそかけのもろ枕かはしぬ涙にくちられもせめ

（これは堀川院御時百首歌思ひを　神祇伯顕仲卿歌也）

やしのきん　堀白

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に

寄弓恋　　源家長朝臣

つれなさはぬめしよひん梓弓ひくよりつよき心つよさを

恋の歌の中に　　前大僧正聖兼

物思ふ涙のそてもいかならん古夜をかさねたるのすゑてやと

続古今巻二
藤原雅経
おつまとの夢すら
ねぬるにことまかき
まとの世とやつきん

前大納言実家

むかしたにつらき此世をすてさのみや人にうらみられん

弘安元年百首歌奉りし時

入道二品親王性助

わかれてもとふへきものをかりそめに契りしもたしぬる袖ぬれ

藤原為信朝臣

逢までとたのむ月日の果もなくうきはかきりの心なりけり

題しらす

前大納言良教

流れきてうきにしづみてかゝるうき世のむかしの袖のぬれ

権大納言実国

續古今恋二
権中納言長方
これに似たるむくいならん
さきの世るあゆへ
もあやなし

これの世に我ならうきや流てもむかひするまてかはらましやは

新後撰和歌集巻第十三

戀哥三

後京極摂政家六百番歌合に
従二位家隆

それも猶人の心をたのまねは我さへ人にうき身なりけれ

忍ふ戀といふ事をよませ給ける
今上御製

ゆしられみをしらせぬ袖の人めはひまもあら袖はかな

山階入道左大臣家十首哥に寄心恋
前大納言為家

ガラス使用

かきりあれはある世かきりと心よりたのまれしともたのみなきかな

中務卿宗尊親王家百首歌に

鷹司院帥

古 たのめをく人の契のありてこそ忘れぬ家もかはらさりけれ

恋の心を

院御製

逢事をまちぬる身のこひしくて契りしことの命ともかな

後京極摂政家六百番歌合に

前中納言定家

あちきなくつらき命まてそなのめならぬ思とそしるめよ

題しらす

従一位禖子

人ゆくのかきりあるをもつらき哀なる身をあはれなる

内裏に百首歌たてまつりし時切恋

遊義門院権大納言

契しもわすれぬ世にはさりともとなくさめてまつ命ともかな

契恋

法印定円

されはこそたのめしをきし偽のある世から人の情なりけれ

藤原光蔵

物とたのまそも又いつはりせんかねておもふ後もとおもはん

素暹法師

いつはりとおもひなからや契らんならひもや人のこゝろさためなきを

ガラス使用

中務卿宗尊親王家百首哥に

前参議能清

とにかくに偽あるぬちぎりとも我のみやたのまれん

平宗宣

逢ことを命にかけてまつ程ハ偽をさへうれしやなし

高階成朝

さりとも又人の心をたのみてまちわびぬれは猶やたのまれん

前中納言資高

いつはりとのハそと契ますハうきかまたれ人やなからん

前中納言経光

忘れすよ心のうちに契おきしハ契しまゝのちぎりやハ契らん

権僧正実伊

いつはりとおもひなからもなをたのまれてまたさらぬもまたれん

津守国道

待とたのむ心よりそハなかなかにせめてあはれとはいへ人のことの葉

近衛関白左大臣

ながらへし人の心もつらく見えても又いかにかなはんあはれの世

安嘉門院大弐

またみむやとも偽なからそしらすそれたのめしよの契なき

賀茂久世

新勅　俊成
とはれぬを門いつまでか
こひわたるべしゆふしでの
かけてもたのむとはん

さりともやいひし言葉をまつほどやいつはりをたのむ心なりけり（らん）
法眼源承
とはれぬを門いつまで松かたてられ槙さしてたのめし言葉（まつらむ）
前大納言実兼
くるとても待たるゝよくいふ心ふあふよもあらんとちぎる命は
院御製
忘れてもこひしかりそなからん契をかはしける人はおもふらむ（なる）
前僧正道性
たえてたのめしよひも過ぐるまで今来むといひしもいつはりし
大蔵卿隆博
いつはりを思ひしらねばなほしまてて又忘られぬ言葉を待（つる）
賀茂経久
契りしはいてて忘られぬ身をもちて頼む程こそ（ちぎる）
百首歌たてまつりし時
法印定為（ちひイ）
こよひはいつは夢をみるらんもさて待ちこそやへ人をまたに（まし）
恋乃哥中に　読人不知
身はさらでとや我思ふ人は偽をねこよひ（よも）
津守国助
人めよく頼みはされど思ふよりたくさめて身の秋はなし

ガラス使用

後拾
たはこゑのやとりのめ
やしあくるも絶こ
かはらに出る月かな

前参議宗時

思ひやるこゝろもぬる月になみたをつくる袖ハ

法眼慶誉

ほのかなく夏の月の光のさや秋の袖の涙なるらん

平宗泰

深からハこの思ひ入にも袖をまちれやとる月かな

藤原親子

うきふしの涙しなくハこぬ人のつらさにそへて月をみるかな
古

百首哥奉りし時待恋

昭慶門院一條

見ぬるもありましも山のはの月みくれはまつらむやと

題しらす　九条左大臣女

たのめくもこぬ人つらさよひくれはあはれそへてある月かな

月前待恋といふことを

今上御製

待わひぬ有明猶乃ことはりハ待秋の月乃けふはなかめし

おなし心を

典侍親子朝臣

たのめしハ宵もいつは出かゝん山の端の月

千五百番哥合に　参議雅経

山のはに入ぬる月をとめかねてそや人のあり明のそら

有明の月をまちいて
まちつるかな

ガラス使用

寄月恋を　後嵯峨院御製

めくりあふ古別のそらもかはる人のつれなさもうき有明の空

百首哥よみ侍りし時待恋　藤原為藤朝臣

こぬよはをかそへてたのまれぬなるさきまくほことよひもわかその鐘かれ（まちこし）

弘長三年内裏百首哥たてまつりし時寄雲恋　前大納言資季

ことかへさらは我もしら雲のよそをたのめぬよりもさそてぬかな

寄鳥恋　参議雅経

待よひそこぬ夜むなしくあけゆけは数まさる古鴫のはねかき

久安百首哥に　待賢門院堀河

なのめならぬことの葉たのみて人の心をうらみさりけし

前大僧正道瑜

たのめぬを我からまちかねて人のつらさやおもひしるへき

平時常

今はしとおもひかへしても猶まかせてまつは心なりけり

左近中将具氏

うつりける人の心の紫にそめしみなれやおもはん

前中納言為兼

はかなしなくるゝをまつもつれなさもつゐにあはれはをもひしる人

法印円修

うらみよ之ハ人乃なされも情なきるハ思ひそれけめ

百首歌奉りし時約恋

按察使實泰

なくさ山の秋わするに約ちれくさのし祢ぬよの秋やなさめん

寛治百首歌の中はつそに寄関恋

後深院御製

中よ寝なれ関のなをつくしけてハかうかうれて

百首歌合に来不留恋

權大納言師重

約えくもそれが乃夕へらやふさへつき待られ約れ

月前逢恋といふ事を

前大納言經任

ひとり寝の床に孤えし月影をとめしもよみちよはなり

恋歌の中に

中務卿宗尊親王

つらかりし時よりわすれ逢ことのほと人猶はなまやあしよ

前大僧正源恵

なけきてハいのちまてんと思ひしからしま（小弁乃し）まてその命なりけり

忍念恋を

前大僧正聖兼

よつゝとふひさめぬ逢事を春の夜のみて人はかたらふち

千載巻三
藤原公衡朝臣
こひしくはかつれ
しるへとつまなき
袖も濡るゝ折りて
まつり

題しらす　　従二位家隆

衣も又あかぬこゝろ秋の暮ならはそれなくれのまろハさ也らん

前大僧正慈鎮

くれし秋と来つまし　あとそや袖ハ涙にくちのこらん

中臣祐賢

わすられん後のうきこゝろをおもふにもあすハいかなれの人にまかすかな

前大納言為家日吉社にて歌合し侍りけるに

寄枕恋　　光俊朝臣

思ひ出の枕なりともあさ川の水のまさるまさる

恋乃歌乃中に　　大蔵卿重経

いかせん約契もなく沢水やそての涙にとおもひきりかれなと

又首歌合ニ来不逢恋

尚侍藤原頊子朝臣

かへるさのゝわかれ暁の袖ハ露しもあかくらしぬ

別恋の心を　　権中納言国信

心あらはなく袖なくハいつもいつもおしみもされかなし

よみ人しらす

こゝろれハおもひ心ならしこのゝゆふつきを袖をそらしむ

大日親重

わかつきの別もおもしぬるなれ袖かなれのつきまゝなくしらせん

法眼源承

せめて猶ほの世をしれたのめつまてならくへぬへき別なりけれは

平盛房

おくこゝろをしひてもとめん朝露のおきて別てもきえぬ命を

千五百番歌合に　大納言通具

俊成
秋風に荻の上葉の
ゆふくれそよのかきり
よつくにも[illegible]
思ひつゝき八月の
ゆふくれそまつ[illegible]
[illegible]

暁の床は草葉のうへなれや露にのこれる袖の涙をみん

後京極摂政家六百番歌合に　寂蓮法師

逢まての思ひはしれぬ数なくて別そ恋のしるへなりける

題しらす　源親長朝臣

わかれ行又見るやつくらんこれとかきりなきわかれなるらんと

大江茂重

かへるさの名残をしみの袖乃月されはこそあれ明かたの空

洞院摂政家百首歌に後朝恋

藤原[illegible]少将

有明の月はかはらぬのわかれにて帰るましかはその月まてをなをまし

題しらす　前大納言教良

まちえて又あかすもあらぬかへるさにわれやかてなかむる月

前大納言実教

恥見えそれ秋もうき面影と人はのこさぬ有明の月

ガラス使用

前大僧正慈鎮

うくしそと思はゝ中〳〵秋の過ゆくらみは霜をこさりき

俊恵法師

秋かせの葛のうらをはさらされは猶うらみそてよ露もこほるれ

式乾門院御匣

けふのみと袖の別乃露けくもめくみし涙やまさるらん露

祝部成良

ゆくすゑは道のさく来ぬることし一夜のやと乃露のよ枕

平久時

うかりしよ我はいたつらに思ひそめてかくよそになる中の契（そおなき）

弘長三年内裏百首哥たてまつりける時寄水恋

近衛関白左大臣

逢みてもなみた袖はけふよりかさねとあかぬ契なりけむ

恋乃哥の中に

尚侍藤原頊子

一すちにたのむ仏乃ちかひにもかゝるみつさはりなりけれ

文永七年九月盡内裏三首哥に契恋

前大納言為氏

待はてむ後こそしらぬ契ともいや心の末乃松山
越らそ

従三位隆教

あさくこそたのめしころせめ瀬川さてもあふせのなそりしそれ

後
うつゝくし逢よのとく
つとこたまへにいそとし
のこるめとつかうる
とこし

藤原泰基

年のをおやれのまんかて条代にゆきまれねらはなきけも
従三位光成

誰かこはむとをけてあふひもの稀にあふよもむもれなん
をと恋乃心を
内大臣

おもひやる人の心を厚そへもかはらしとそかれ思ふ浮ひらし雲
藤原為経朝臣

たつ稀くも月ゐる人を聞えぬあふこの夜のあはれぬ夜
恋哥の中に
従三位氏久

まくら海の底をありてしはせんみるめはとのゝみはてそ

もくらすゆきまよふと
いあめのゆめやすき
くほしさまいうそられ
何

後京極摂政家六百番歌合に
前中納言定家

面かけのをしへしやとにさきたちてこたへぬ風乃松にふく声
題しらす
源有長朝臣

いてゝくはさし袖のともあらせをやりてはらふ道芝の露
従大納言師信

ゆふつけのまちたらん人もたのめきまくらいひくらしさまよ山
左
（伊勢）
お条院花長家哥合に寄河恋
藤原親盛

いまこむと宿のこゝろは夜はすこねかりし袖ぬれしぬら

ガラス使用

続後撰恋四　前大納言基良
濵千鳥なにはのうらに
ありとてもしらぬ
物ゆへ身をやかへなん

題しらす　権中納言経平

住吉のきしのあさ沢みてもわすれ草はありといふなり

順徳院御製

濵千とり昨日もけふも跡はあれとこゆるきの浦に残るのこそなき

続古今恋二已上

鎌倉右大臣

秋をへて松浦の山の葛かつらうらさひしくもなりにけるかな
まつら後古
うれ後古

藤原雅経

里のあまのかりそめなる跡もなしやそれみなれるとそとふ
吹風継とも事を

平時村朝臣

おろかにも風にまかせぬ人のつらさゆかりの秋の夕霧
をしからぬ押手の女のおもひなる夏にやつてよ
とふにこそれはうきもの

大宰権帥為経

引ぬるははかなきうつせをはしらぬ夏といひてる夜を
みよし　　みん人しらす
みし夏のわすれしほにはたちゐさ袖をぬらしつゝは
あはれてなきもの

ガラス使用

くやしくそくみそめ
てける浅けれは袖の
ぬるゝ山の井の水

新後撰和歌集巻第十四

恋歌四

弘長元年百首歌奉りける時遇不逢恋　　衣笠内大臣

いかにせん岩間をつたふ山水の浅きちきりは末もとほらて

弘安元年百首歌たてまつりしとき

権大納言典侍

くやしくそ汲ひそめけるそれまてまさる山の井のあさき契と

前大納言為家の家乃百首歌に

信實朝臣

古今
忘なんと思ふとこ
もあるも人の秋
まつそ恋しき

柳なんしるやとてく猛をかけても心なりきと
郎守

僧正實瑜

七夕乃あふ夜まれなる契にもをとらぬ中をへたてやはする　不審

読人しらす

逢事をまたいつはりとおもひしにかりそめ
これさへ人にわすれられんかつらのつらさをもこそ

従三位忠兼

あひみても又いつまてかなけきつゝなをうき世なるらん

宝治元年十首歌合に遇不逢恋

花山院入道右大臣

はつるまのねくれ[illegible]をかくしてひかりをねかたれつゝ[illegible]

月歌とて　前太政大臣

長き夜は[illegible]まても心あらん人の涙も[illegible]世なり

百首歌奉りし時　忠良

権大納言公顕

[illegible]も人の心をまかせて[illegible]月[illegible]ひかる

白河殿七百首歌に寄道恋

後嵯峨院御製

いまそしる[illegible]人[illegible]の[illegible]秋[illegible]の[illegible]

題しらす

権中納言公雄女

かくしとは[illegible]の空をよそにて旅に月をみるらん

今出川院近衛

あくかれて秋深き[illegible]月をとふ[illegible]をきけめ

前大納言基良

ゆくすゑいくよの[illegible]月影[illegible]けをさえひかるらん

千五百番歌合に

前中納言定家

おもひ出よ[illegible]のおもかけもわすれぬ[illegible]の有明の月[illegible]らん

嘉陽門院越前

いたつらに[illegible]やそてなる[illegible]の

ガラス使用

家に五十首歌よみ侍に月前恋

太宰権帥為経

思ひ出る月もつきせのまくらにみしや別のありあけの空

恋歌の中に

源親長朝臣

つれなくれ我面影のかはりけるみとも見さらし我月乃月

遊義門院大弐

うき中はそれも見まよふ面影の忘れぬのちや我見えらん

法眼行済

忘れさよ忘しもあらし思ひ乱れ袖の涙は我のみそしる

源家清女

まれにつきて相見しもらく偽ろうや

玉葉第三

同人

世中にいつかもはてし忘れぬよこ中うよゆくそをとをらさる

我の床はかれぬ契もまた夏衣面影ちかき

従三位藤原宣子

うつゝそれかきりぬ契りはかなくあはぬ夜のまもりの継

洞院摂政家百首歌に遇不逢恋

前大納言為家

忘れねよ夏ころもむかしをなほそれまてに我のまきりらん

津守国助

なにかまた契りし終るの人はむすひし夜なみにまて

丹波経長朝臣

秋の夜はうき夢ないくらの契りて我々人を何かうらみむ

ガラス使用

法印厳勝

逢みしハ一夜の夢ハ草枕むすひもはてぬ契りかなしな

権大僧都静深

かりそめの夢ならハ後ハ草枕又もむすはぬ契りなりけり

後京極摂政家六百番歌合に

従二位家隆

いそかれぬその夜をかへてもかはらしの夢路なりけん

忍恋の中に

左大臣

さめん物と逢ハまのつらきからそ中々なりやうきねの夢

中原師宗

むすひねの夢路ハかりにまくらにてさむるもさひし別れなりけり

従一位瑛子

見しまゝに又もあはれぬうつゝこそそれも夢かと思ひなされき

百首歌めされしついてに遇不逢恋

太上天皇

頼みてもおなし涙の袖の色も見えしにさへかはらさりけれ

弘長元年百首歌たてまつりける時おなし心を

従二位行家

思ひ河あふせのいまハかへりて又ハ涙のまさりゆくらん

題しらす

惟宗忠宗

ガラス使用

浪ゝあり袖の湊のうき涙くゝるくれなゐによそにたのまれ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　よし

高階宗成朝臣

いつまてかさはなしまろつきえ見しかきね袖のうら浪

観意法師

よそにみんよそにはかゝる沖つ浪うきてこゝろめくるなさけは
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　なし

内裏又百首哥合に歌給侍し

昭訓門院大納言

なにとても猶かゝる浪間まれなる沖のつゝきへ

忍恋の中に

前参議長成女

いかにせん雲井のよそにつくすとも成りし人の玉章

権少僧都澄覚

あつまにて人まつさのやはたの小田のほにそ出

聞恋といふ事を

源兼康朝臣

たまさかにありし山のかねてよりおもひそめてはとおもひけるかな

題しらす

大江政国女

昔にも道のさゝ原わけまよふ秋をへてそ人をまちそ

百首歌奉りし時遇不逢恋

前大僧正良玄

見るまゝにうき世の山のかけもなしかよひなれこのさるしらしと

秋の哥
うらハいくたそさきぬ
さてハらくまさぬ夕
の風のおちかかり

無き身の中は　　従三位藤原宣子

うへてやらんやまよるれぬらんなとさらかはわすれてなかし

法眼源承

君稽乃契りハ秋までのむしろて後ちぎりまてかはらし

藤原基任

あふこともむかしにかへる人の心よつきぬ中々よそまかれハ

前大僧正守誉

今はとて忘るるとてもあはれなほいかさぬ夕と袖にかけまし

源親教朝臣

しひそしハ文をのつらさそらやしらすハまさぬ袖をぬらさて

絶後逢恋と　　前大納言実教

そのまゝにかはらハいつかせんうきは絶えぬ契けれ

題しらす　　読人しらす

かくてもとはれしほのまなきを我身ひとつの浦としおもふ

前中納言為兼

我もさそ忘るれとこそ契りけめ人やそかへつ人もうらみん

内裏人首歌合に逢後恨恋

遊義門院権大納言

思ひきや今ハうきハ恨をそへやらん人のまことのものかはれならん

藤原為秀朝臣

ガラス使用

おやふくよふこゝは誰やつこんかゝらふかわる人のこゝろは

恋歌乃中に　平時春

何とぬ衣のつまりけきは身上人の枕乃ちりれ先ん志ろ能なり

賀茂重貞

よみお枕乃ちりよりそゝてもちゝやゝ浦しつゝけ鳰と

宜秋門院丹後

余おもふこゝ遊ちしはゝ思くまう紀方乃枕もちろねやはきし

極義門院

ところせんつゆきりをこそも又枕ちゝさゆるらんよりさ様

よみ人しらず

うらくけり歎を人よかくしてもうらきは我身よ枕ありなれ

身よおもうわれうたのちつまるまゝ然さてもそのりしんまいは

同じ世にいきうとうしも身方の心みぬゝは命なかりけり

平行氏

先んしぬ方はおきし世よおつへてうらをみるもうきねる

中務卿宗尊親王家百首歌に

典侍親子朝臣

いつまでん今さらはおかし世中よわりなき人よ志られぬなる

題しらず

衣笠内大臣

あつくいていけり命のつまるまでさかりゝの人さへそなる

853
166

3216

式子内親王

こひ〳〵てそなたになひくけふりあらはいひしちきりの
はてとなかめよ